草狂ひ

わたしは　草
飛ぶことならぬか

わたしを押へこんでゐるのは　わたくしであり
土であり　風邪であり　目であり
わたくしではない
緑色の線条に食ひこむ微細な水の粒であり
昨夜も降つた雨のしづくでもあります
自分が廻り　自分を伸ばし　目を山に向ける
午前十一時に吹く二度目の風
山のふちどられた金色と　山のへこんだ所の木のゆれてゐるのと
木のゆれる前に自分がゆれてゐる
木の遠いのに間近くのやうに音たててゆれてゐる
自分はしなやかにゆれてゐる
それつきり　わたくしの　眠り
海のことを考へたり　疲れた彼のくりかへし崩れる音を考へたり
嵐のあるといふ地方　氷ばかりの地方
つめたい白い砂の降る地方　紫色の果実をもぎとる鹿の鼻づら
暗い夜の中を　身体全体を光らせる虫
ふくらんで　たるんだ線で　上を　ゆつくりと　白い光でも　黄色い光でもなく
白い光なら　わたくしも時々　たとへ瞬間のことであらうが
どこかへ向けて　まぎれこむやうに　鏡のやうに反射する

だが　彼は飛ぶ
彼等は自己の目的に向つて飛ぶ
わたくしの思ひが　わたくしを押へこんでゐるものの方へと向く
立ち　歩き　倒れる
風であり　内面への目であり　真昼であり
千切れることもなく　しなやかなわたくし
乾ききつた土を握り　握りしめてゐるわたくしの根

遠い山の頂上に登り行く白いもの
わたしのからだは
遠い風の中で廻りはじめるのだ
とめどないくりかへし
寒暖　強弱　晴雨の谷間
つめたくなる前の　夜の前の　わたくしの自分の　くりかへし

山のあひだの木を押へこむ
雪が　山を押へこむ　また雨が降る